13-7-M202-10
インドネシアの知的障害学校における協働授業研究の試み
○中田英雄（筑波大学）

2006年8月にインドネシアの知的障害学校で協働授業研究会を開いた。参加者は現職教員、校長、大学教員、大学生、行政担当者、保護者の約300名であった。日本とインドネシアの教師がそれぞれ体育と算数の授業を行い、次に両国の教師が協働でそれぞれの授業を行った。両国の教師は指導案を作成して授業に臨んだ。授業後には参加型研究協議会を開き、良い授業について協議した。両国の教師による授業と協働授業、参加型研究協議会、実践活動の講演から成るこの方式の有効性を確認するためにアンケートを実施した。その結果、参加者の99.6%が学校の質向上に有効であると回答し、98.3%が日本の教師の授業は参考になったと回答し、86.3%が本国で授業研究を取り入れるべきだと回答した。参加した校長グループから「このような授業は、普及に値する良いモデルである」との評価を得た。授業研究会の文化がないインドネシアで協働授業研究会方式が有効であることを確認することができた。

13-7-M203-1
アダプテッド・ダンスが重症心身障害のある生徒の覚醒状態と表出行動に及ぼす効果について
○松原 豊（筑波大学特別支援教育研究センター）

重症心身障害（重度重複障害）があり日常的に覚醒水準の低い子ども、様々な活動を通して覚醒レベルを上げることにより、生活リズムを安定させ、身体的、心理的負担を軽減し、より多くの表出行動を引き出すことができるようになると思われる。本研究では、重症心身障害があり覚醒レベルの低い肢体不自由養護学校の中学部生徒に対してアダプテッド・ダンスの活動を実践し、覚醒状態の変化および表出行動について検討した。その結果、活動に参加した3事例において、ダンス活動中の覚醒レベルが上がり、笑顔、自発的な動きなどのポジティブな表出行動が見られた。覚醒状態を高め、表出行動を引き出すことができた要因として、音楽による聴覚的な刺激、身体的な触れ合いによる触覚的な刺激、前進・後退・回転などによる前庭覚刺激など、多様な感覚・運動の刺激が身体子フォークダンスを中心としたアダプテッド・ダンスによって提供されたためと考えられた。

13-7-M203-2
知的障害児を対象としたダンス即興における動きの特徴
-集団即興と個人即興に着目して-
○安田友紀（大阪体育大学大学院）、林 信恵（大阪体育大学）

本研究の目的は、知的障害児を対象とした集団即興と個人即興における動きの特徴を明らかにすることである。
15歳から18歳の知的障害児4名（ダンス経験者3名・精神障害者1名）と、8歳から11歳の健常児3名の計7名でダンス練習を行ない、その中で精神障害児（15歳1名）を対象者とした。月2回の頻度で1年5ヶ月行なった練習における最後の5ヶ月を実験期間として、その内に6回の測定を行なった。ダンス練習後、縦10.79m、横14.72mの範囲において、3分間の集団即興（7名）を行ない、その後、同じ音楽を用いて3分間の個人即興（1名）を行なった。それらをビデオカメラで撮影し、ゲームプレーカー・デジタルビデオ分析システムを用いて集団即興と個人即興における運動分析を行なった。分析尺度は「動きのカテゴリーと種類」、「身体部位」「エフォート（Effort）」「移動空間」である。その結果、各尺度において集団即興と個人即興それぞれに特徴がみられた。